

## 連鎖する空き家再生 —JR越後線沿線で広がるDIYによる空き家再生の輪—

松井 大輔 新潟大学工学部建築学プログラム

### 1. はじめに

今年、開港150周年を迎えた新潟は、第二次世界大戦の空襲による被害がほとんどなかったため、中心市街地に多くの町屋や洋館付き住宅が残存する。また、周辺市町村との合併を繰り返してきた結果、市内には小須戸や白根などの歴史的市街地が点在している。全国的にはまだ知られていないかもしれないが、新潟は多様な歴史的景観を有する都市なのである。近年、全国の歴史的市街地では空き家となった歴史的建造物等の再生が盛んに取り組まれているが、新潟及び近郊においても同様の動きが見られる。かつて市場として使われた一帯を再生した「沼垂テラス商店街」などが、その先例である。

本稿では、現在、新潟駅から吉田駅までのJR越後線沿線の市街地（下町・関屋・内野・吉田）で進められる空き家再生の動きと、ここに関わる人々が自然発生的に緩やかに繋がる、空き家再生のネットワークについて紹介したい。

### 2. JR越後線沿線でのDIYによる空き家再生

市指定文化財の旧小澤家住宅があり、湊町新潟を代表する歴史的町並みを有する新潟市中央区下町では、古民家と土蔵を民泊施設として活用する「Otonariプロジェクト」が進行中である。解体や色塗り、蔵から荷物を運び出すワークショップなど、様々な参加型イベントを実施しながら、多くの人に親しまれる建物を目指した再生が行われている。

同様に、イベントを通じて様々な人々との関係を作りつつ空き家再生を実施するのが、新潟駅から電車で1時間ほどのところにある燕市吉田で展開する「ヨシダリノベシヨンプロジェクト」である。ここでは、建築士とタイル雑貨デザイナーの夫妻を中心として、各種デザイナーや商店街関係者が積極的に関わり、DIYのイベントやマルシェ、クラウドファンディングを実践しながら、「人々の集えるカフェ」を目指した再生が行われている。下町と吉田の取り

組みは、将来的に複数の空き家を活用し、地区全体を再生していくことを目標に掲げるところも類似している。

この目標を既にも実現しつつあるのが、新潟市西区内野における取り組みである。内野は古くからの在郷町で、新潟大学五十嵐キャンパスが移転してきてからは近隣に多くの大学生が住むようになった。この町の空き家再生は、新潟大学の卒業生を含む20～30代の若者が中心となり、これを地域住民が支援する。「つながる米屋 コメタク」、「ウチノ食堂 藤蔵」、「雑貨・古道具 デネッカ」といったユニークなお店が、空き家や既存店舗の一部をDIYで改修・活用し、地域に新しい風を呼び込んだ。さらに、彼らがサポーターとチームを組み、シェアスペース「又蔵ベース」が新たにオープンした。ここは、ワークショップやマルシェを開催する「又蔵びらき」というイベントのほか、内野での暮らし方の研究や空き家の情報収集を行う、まちづくりの拠点としても活用されている。また、又蔵ベースのメンバーらに物件の相談をした夫妻が、現在、新潟市中央区関屋で料理店「ナバイタ」を開店するために、建築士の指導を受けながらDIYで空き家再生に取り組んでいる。このように内野の取り組みは、他地区の空き家再生に波及している。

### 3. オーナーがつながり、サポーターが繋がる

JR越後線沿線のDIYによる空き家再生では、それぞれの地区で活動するオーナーが繋がりはじめた。内野と関屋との関係は先述の通りだが、例えば、下町のOtonariプロジェクトのオーナーが内野に古材を求めにくる、内野のオーナーたちが吉田の町歩きを企画するなど、繋がりの形態は多様化している。お互いに刺激を与えながら、協力し合い、さらにサポーターたちも活動を通して顔なじみとなり、JR越後線沿線の空き家再生の輪はどんどん広がっている。

本稿で紹介した多くの物件が今春オープンの手筈である。新潟にお越しの際は、ぜひ足を運んでいただきたい。



写真：(左から) Otonari プロジェクトでの土蔵の説明の様子、ヨシダリノベシヨンプロジェクトのイベント風景、又蔵ベースのマルシェの様子、ナバイタのDIYによる改修風景